

今、そしてこれからの 中学校教育が担うもの

社会・子ども・教師がどのように変化し、
その中で、中学校は、今後どのような役割を期待されるのか。
全日本中学校長会の新藤久典会長と、全国連合小学校長会の向山行雄会長が、
これからの学校づくりや指導の在り方について意見を交わした。

社会・子どもの変化

重要性を増す「論理的に考え抜く力」

情報化で自己の可能性を
見限る子どもが増加

— 今の子どもを見ていて、近年の社会変化の影響を受けていると感じるのは、特にどのような点ですか。

新藤 今の子どもは、生まれた時からネット社会の中にいます。大量の知識を手軽に得られるが故に、先が見えたような錯覚に陥ってしまうのでしょうか。「頑張ってもろくなことはない」などと、人生や社会を見限っている

ような態度が目立ち、「自分の可能性を信じて追求する」という大切な力が足りないようです。残念なことに、保護者にも「うちの子どもはこの程度だ」と見切りをつけてしまう傾向が見られます。しかし、中学生はまだ十代の初め。これから無限の可能性があるので、教師が子どもの力を信じて伸ばしていく

強い気持ちを持つ必要性を痛感します。
向山 情報化により、直接体験が減って間接体験が肥大化していることや、子どもや保護者と教師との情報量の差が一気に縮まったこ

とも大きな変化です。こうした社会や子ども、保護者の変化にいかに対応していくかという視点が、これからの学校教育には求められるのではないのでしょうか。

新藤 例えば、保護者に対しては、かつてのような「学校に任せてください」という姿勢ではなく、「一緒に育てましょう」という協力関係の構築が大切になっていきますよね。また、間接体験が増え、本物とじっくり向き合う体験が減っている影響として、思考を面倒に感じる子どもが増えていると思います。考えるのを早々にやめてしまい、他に正解を求めようとするのです。もっと粘り強く考える力が必要です。更に言うと、自分を信じて、自分は本当はどうなりたいたのか、そのためにどうすれば良いのかを、論理的に考え抜く力がますます重要になると感じています。

こうした力を付けるために、今後、どう指導していけばよいのか。単に知識量を増やしたり、応用問題を繰り返し解かせれば応用力が付くという学力観から抜け出し、子ども自身に考えさせたり、体験させたりする授業に転換する必要があると思います（P.30 教師の指導観参照）。

少子化が進む日本で求められる 「付加価値を生み出す力」

向山 情報化だけでなく、少子化・国際化

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第1回

中学校教育の不易と流行

全日本中学校長会会長
東京都新宿区立西戸山中学校校長

新藤久典

しんどう・ひさのり◎教職歴35年。東京都公立中学校教諭、東京都東村山市教育委員会指導室長、東京都教育委員会管理主事などを経て現職。モットーは「Never say "can't."」を信じて、まず行動する人になろう」



全国連合小学校長会会長
東京都中央区立泰明小学校校長

向山行雄

むこうやま・ゆきお◎教職歴37年。東京都公立小学校教諭、東京都文京区教育委員会指導主事、東京都教育庁指導部指導企画課指導主事、東京都品川区教育委員会指導課長などを経て現職。モットーは「志を高く掲げて、力強く前進しよう」

も進みます。その中で、**これからの時代を生き抜く日本人に求められる学力**（P. 11 図

① 将来の社会を生き抜く学力）を考え続ける

ことが重要だと思えます。では、それはどのような学力なのか。現在、小・中学校には約1000万人が在籍していますが、10年後には約900万人になるという推計もあります（P. 28 今後10年の児童・生徒数の予測参照）。

単純に考えても、現在よりも一割増の力を付けなければ、日本は生産力を維持できません。中・長期的に考えると、付加価値を生み出す力、言い換えれば、基礎・基本をしっかりと習得した上で、それを活用する力をいかに育て

るかが重要な課題になりそうです。「知の更新」と言ってもいいかもしれません。

新藤 おっしゃる通り、社会で求められるさまざまな力を子どもに付けることが学校の役割です。ところが、これまでの中学校教育は、教科学力の保障にばかり目が向きがちでした。進路実績を気にする保護者の視線などがあり、従来の学校経営はテストの結果に一喜一憂する「守り」の面がありました。しかし最近では、高い意識を持ち、行動に移す校長に出会うことが増えました。進路実績など表層的な学力を問題にするのではなく、学校の置かれた状況を把握し、地域の教育資源を生かしながら、独自の学校経営に取り組み動きが出てきたと思います。「自分たちで工夫して取り組もう」と考えるようになってきている

のです。学校が主体性を発揮し始め、「攻め」の姿勢に転じつつあるのかもしれない。

向山 ここ2、3年で社会の潮流が変わり、長らく続いた「学校バッシング」と言えるような状況が収まってきたと感じます。その変化を受けて、学校が受け身ではなく主体的になっているのではないのでしょうか。

「24時間教師」への抵抗感 「待てない指導」が増えた

——先生方の様子で変化を感じられることはありませんか。

新藤 教師全体の傾向としてやや気になることがあります。例えば、子どもの間で流行している事象について、一昔前までは、教師は自分で調べたり聞いたりして、ある程度は把握していました。ところが最近では、携帯電話やインターネット上の問題について知識がいまばかりか、関心すら持たない教師がいるようです。子どもに浸透している文化の知識や理解がないまま指導だけしては、問題の解決につながりません。情報化社会の難しさがあるのは確かですが、「教師は子どもの社会を少しでも知っておくべき」という考えが失われつつあるのは問題だと感じます。

向山 新採の離職率の高さも気になります。これは、我々の育て方に問題があるという反省もあります。若い先生方の価値観の変化

*プロフィールは取材時(2011年3月)のものです

と無関係ではなさそうです。教師は帰宅後も休日も、自宅に電話がかかってくる場合があります。「24時間、教師である」という覚悟がなければ続けられる仕事ではありません。若い先生方には、その覚悟が十分ではないと感じられることがあります。

新藤 私たちの若手時代に比べて、今の若い先生方は優秀だと思います。ところが、授業が上手で人間的にも素晴らしい先生が、突然、辞めてしまうことがあります。早々に自分に見切りをつけてしまうんですね。

また、他の先生の授業や学級経営を見て、良い面を盗むという発想も弱くなりました。

中学校の役割

当たり前前のごとを当たり前前にやる

奇をてらわずに地域の資源を生かした「学校ブランド」を築く

——学校を取り巻くさまざまな変化がある中で、義務教育を担う立場にある中学校は、どのような役割を果たしていくべきでしょうか。

向山 義務教育に限らず、すべての学校の役割は「今の充実」「将来への備え」の二つにあると思います。時代によってどちらに重点を置くのかは異なりますが、この二つは今後

授業を参観する機会を設けても「私には出来ません」と言う。それは当たり前前で、10年後に出来るようになるために、今すべきことを考えてほしいのです。加えて、これは若手・ベテランを問わず、生徒を「待てない」指導が増えている点も気がかりです。教師の多忙化や教師自身がすぐに答えを得ようとする傾向があるのか、生徒の思考を待たずに、すぐ正解を教え込んでしまいがちです。

ただ、これらの変化を「昔は良かった」と考えるだけでは前進できません。時に外部の力を活用しながら、学校全体で指導力を高める努力と工夫が求められるでしょう。

も学校経営の不易であり続けるでしょう。一方、学校は社会の変化に合わせて変わっていかなくてはならない面もあります。これからの公立小・中学校は、地域社会の特性に目を向けて「**学校ブランド**」を構築し、**各校の良さを生み出し、校内外に発信していく姿勢**

(P.11図②**学校ブランドの構築**)が求められると思います。私は、学校経営は老舗の経営と似ていると思います。伝統を守るだけでなく、社会の新しいニーズを取り入れながら信頼を守り続けていくからこそ、老舗として

長く繁栄していくのです。

新藤 小・中学校は義務教育だからといって、あぐらをかいてはいけません。子どもたちに「この学校で学びたい」と思ってもらえるかを常に問う姿勢が、学校のブランドづくりにつながり、義務教育が更に充実するのではないのでしょうか。

向山 そうですね。ここで言うブランドという言葉は、10年ほど前、改訂学習指導要領のキーワードとして流行した「特色ある学校づくり」とは異なります。予算を注ぎ込んで奇をてらった「特色」をつくるのではなく、その学校ならではの方法で地域の資源を活用し、学校を活性化するという意味合いです。文化や伝統、人材、生産物など、さまざまな資源に目を向けて教育に生かしてほしいと考えています。

新藤 奇をてらった取り組みは、決して長続きしませんでした。当たり前前のごとを当たり前前にやり続けることが、本来の義務教育の役割であることを忘れてはならないと思います。その姿勢が学校としての強みを生み出し、ひいては揺るぎない学校文化につながると信じています。

向山 義務教育では、原則として子どもは学校を選べません。それぞれの学校が特色にこだわらざるあまり、教育内容が他校とは全く異なってしまうのは問題だということも、頭に置いておくべきです。



**校長は学校づくりの道筋を示し
校内で共通の目標を持つ**

新藤 学校づくりを進める上では、**校長のビジョンとリーダーシップが鍵を握る**（P.11

図④校長の率先垂範）と思います。これがしっかりしていない中学校は、たいてい生徒が荒れるようになります。校長は、先生方が校内で率直に意見を言える雰囲気をつくり、皆で

学校づくりに取り組んでいこうという姿勢を持つことが重要です。

向山 同感です。私は校長会などの場で「志を高く掲げ、力強く前進しよう」と言い続けてきました。校長は、志に基づいた学校づくりのビジョン、その実現のための道筋を示し、更なる過程で浮上する課題を皆で解決していくことが大切だと考えています。

新藤 校長を中心に教師が共通の目標を持つことは重要です。中学校が陥りやすい傾向の一つに、学校が荒れてくると、生徒指導に追われて共通の目標を見失ってしまうケースがあります。目の前の生徒指導に追われる毎日に疲弊してしまい、教員組織がばらばらになってしまうのです。そういう時こそ、改めて目標を示し、学校全体で共有することも、校長の大切な役割だと思います。また、一人ひとりの教師は個性や能力が異なりますから、多様なアプローチを認めると共に、若い教師の持つ力を生かすという視点も必要ではないでしょうか。

向山 校長の仕事とは、オーケストラの指揮者のように、個性的な「楽器」を上手に束ねていく仕事ではないかと思っています。

新藤 確かに。ただ、小規模校では、一人の不協和音の影響が非常に大きく、なかなかまとまらない場合もあるようです。小規模校には、一人ひとりの教師が多くの役割を担い、負荷がかかりすぎるといふ課題もあります。

授業に集中する余裕がなく、大学院まで出ている新採の先生などが「何のために学んできたのだろうか」と、目標を見失うこともあるようです。そうした学校では、教師の役割分担を改めて見直す必要があるでしょう（P.29）
29 4 一日の残業時間、持ち帰り時間参照。

**生徒指導中心ではなく
まず授業で勝負する**

向山 今後、世代交代が進み、若手の先生方が急速に増えていくことも、小・中学校共通の課題となりそうです（P.28）
2 公立中学校の年齢別教員数参照。

新藤 そうですね。長年、新採の先生が赴任しなかったため、いつの間にか校内に新採を育てるシステムがなくなり、今、若手の先生が来ても育てられないという学校が増えました。そうした背景もあり、東京都では、08年度に人材育成の基本方針とともにOJTのガイドラインが出されました。

向山 日本の教師の指導力は世界のトップレベルにあり、昔に比べて少しも劣っていないと、私は思います。しかし、新学習指導要領によって授業内容や時数がこれだけ増えるのですから、大きな壁にぶつかるのではないかと心配しています（P.31）
7 新学習指導要領への不安参照。

私は授業の上達には三つの方法しかないと

思っています。「他人の授業を見て学ぶ」「自分の授業を見て批評をもらう」、そして「自分で自分の授業を記録して分析する」です。全国の小・中学校には、この努力を積み重ねていただきたいと思います。多忙であっても、いかに授業研究の時間を捻出するかは大事な視点です（P. 30 6 年間の校内研修実施回数参照）。

新藤 教師にとって、授業力の向上は絶対に

新教育課程の全面实施の前に

教師が夢を語り、夢を語る生徒を育てる

生徒を伸ばすための具体的な目標と方法を示す

——これからの中学校教育で、特に意識すべきことは何でしょう。

向山 新教育課程の全面实施により、授業内容や時数が大幅に増えたカリキュラムで学んだ子どもが中学校に進学していきます（P. 31 8 新教育課程で予想される教育内容参照）。

習得と活用を中心とした学習が、中学校でどれくらい花開くかをPISA調査の結果から分析したり、その反作用としての問題行動がどれくらい増加するかを検証したりすることが、義務教育の今後を考える軸の一つになるでしょう（P. 29 3 OECD生徒の学習到

欠かせません。しかし、これまでの中学校では、「生徒指導が落ち着いてから授業研究に取り組もう」と、生徒指導を理由に授業を二の次にする傾向が見られたのも事実です。しかし、授業が分らないからこそ荒れる生徒がいることを見逃してはいけません。**生徒指導中心の文化を見直し、授業で勝負するといふ強い気持ちを持つ**（P. 11 図 3 授業づくり）ことが教師に求められていると思います。

達度調査の結果推移参照）。

新藤 小学校で身に付けた力を、中学校がいかにつまみこんでいくか。義務教育全体で子どもを育てるといふ視点がより重要になります。

私は、夢を語る生徒を育てるといふ視点も大切にしたいと思っています。子どもは教師を通して世の中を見ていきますから、教師自身が夢を語る人間でなくてはなりません。しかし、精神論だけではだめです。「きみなら出来る。先生についてきてごらん」と上を向かせ、「ここまで到達しよう」という具体的な目標と「どうすれば到達できるか」というやり方も示さなくてはなりません。

向山 教師が一つひとつのことに対して、今までより少しの努力を増すだけでも、学校は

大きく変わるのではないのでしょうか。当たり前のことを今より少し丁寧にすればよいと思います。まずは、校長自身が率先垂範して、先生方に示すことが肝要かと思っています。

新藤 私は、朝礼では「Never say "can't"」を年間テーマとして、毎回、生徒の心に訴える資料を配り、話しかけることにしています。その話は、実は教職員の心にも訴える内容となるように工夫しています。また、生徒会の役員との懇談会を開き、生徒の提案を積極的に受け入れるように心がけています。そうすると、子どもを主体として学校を変えていくという雰囲気校内に生まれていくのです。また、保護者から強い要望があった時、建設的な話し合いで解決できそうなら先生方に任せますが、そうでない場合は全て私が対応するように徹底しています。そのように管理職としての姿勢と覚悟を明確に示さなければ、先生方はなかなかついてきません。

小学校との相互理解を深め「教師の中1ギャップ」を解消

——今後、更に広がると思われる小中接続に関して、ご提案をお聞かせください。

向山 中学校の理科の授業を見学した際、先生が小学校で習う顕微鏡の使用法を長々と説明している姿を見て、特に**小・中学校のカリキュラムの相互理解**（P. 11 図 5 小中連

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第1回

中学校教育の不易と流行

携）が不可欠と感じました。中学校の教科担任制についていけないことも、いわゆる中1ギャップの要因です。そうした制度面の接続の在り方も考える必要があるでしょう。

新藤 反省を踏まえて言うと、中学校では教師側に「中1ギャップ」があると悩まざるを得ません。中学校では3年生を受け持った翌年に1年生の担任をすることがよくあります。すると、1年生の能力を低く評価し、小学校で立派に出来たことも出来ないようにしてしまうのです。例えば、小学生の時は出来ていた給食の準備などが、中学校に入ってからなくなる場合があります。これは中学校の指導の課題ですね。小6生と中1生の教師がもつと交流し、子どもへの理解を深める必要性を感じています。

向山 教育の検証には20年が掛かるとよく言われるように、小中接続の効果や課題はまだ明らかではありません。問題行動の発現率など短期間で測定可能なデータを参考にしつつ、自校の実態に合った形を模索すべきではないでしょうか。

新藤 小学校で学んだ内容を土台として適切に活用することで、これまで以上に高い目標を設定して子どもを伸ばせる可能性がります。そのために、小学校の授業の見学や人事交流など、出来ることから小中接続を取り入れる姿勢も大事だと思います。

——本日はありがとうございました。

これからの中学校教育を考える5つのキーワード

変化・課題

社会

- ・2020年までに小・中学生の人口は1割減
- ・情報化・国際化の進展
- ・人間関係の希薄化
- ・就職内定率の低下、フリーターの増加

子ども

- ・直接体験の減少、間接体験の肥大化
- ・コミュニケーション力の低下
- ・将来の夢を見いだせない傾向の強まり

保護者

- ・団塊ジュニア世代が生徒の保護者の中心に
- ・子どもの力に見切りをつける傾向

中学校教師

- ・新学習指導要領の全面实施
- ・教師の急速な世代交代
- ・多忙化、多忙感が増大
- ・学校の小規模化
- ・教師と子ども・保護者の知識量の差が縮小

1 将来の社会を生き抜く学力の育成

- ・論理的に考え抜き、可能性を追究し、夢を語る事が出来る力
- ・少子化・国際化社会において、付加価値を生み出す力
- ・高校受験だけを目的としない、基礎・基本を習得し、それを活用する力

2 揺るぎない学校ブランドの構築

- ・伝統を守りつつ、社会の新しいニーズを取り入れる
- ・地域の資源を取り入れながら、学校を活性化して特色をつくる
- ・「この学校で学びたい」と子どもに思ってもらえる学校を目指す

3 生徒に力をつける授業づくり

- ・「本物との出会い」を重視した授業
- ・今の学びと社会とのつながりを意識した授業
- ・回り道に思えても、生徒を「待つ」指導

4 教師集団を引っ張る校長の率先垂範

- ・長期にわたりぶれない目標掲げて、教師間で共有する
- ・目標実現のための道筋を示す
- ・教師の「とりで」となる

5 義務教育強化のための小中連携

- ・教師の「中1ギャップ」の解消
- ・9年間で子どもを育てる視点
- ・出来ることから少しずつ交流を深める

不易 「今の充実」と「将来の備え」を図る教育、奇をてらわず当たり前の取り組みを実践する教育

次ページからは上記のキーワードを具体的にイメージするために、3校の事例を紹介する。いずれも奇をてらった取り組みではなく、校長が主導しながら、置かれた状況に応じてより良い学校づくりを目指している